

在宅看護学実習を履修した学生の学び －実習終了後のレポートの分析より－

鶴見三代子¹⁾, 綾部明江¹⁾, 山口 忍¹⁾, 高村祐子¹⁾

¹⁾ 茨城県立医療大学保健医療学部看護学科

要旨

【目的】 在宅看護学実習を履修した学生の学びを把握し、在宅看護学の理解を深めるための課題や方向性を検討する。

【方法】 実習を終了した看護学科4年生51名のうち、承諾が得られた学生のレポート「在宅看護の対象者が求めている看護とは何か」を対象とした。それらを質的帰納的に分析した。

【結果】 同意の得られた31名分の学生レポートA4用紙1枚を分析した（回収率60.8%）。学生は、訪問看護事業所での実習をとおして、在宅看護では【対象者ごとに異なる様々なニーズの理解】、【住み慣れた自宅で療養者や家族が安心して生活できるための看護実践】、【療養者や家族の気持ちに寄り添うための信頼関係の構築】という3つの視点が重要であると捉えていた。

【考察】 学生は4日間の実習に参加することで、これまで臨床実習で学んだ看護の視点をもとに、療養者・家族、訪問看護師の状況を的確に捉えた上で、在宅看護に必要な要素を学習できていた。今後の課題として、実習期間の延長と、学生の学びが深まるための効果的な指導方法の検討が示唆された。

キーワード： 在宅看護学実習、看護学生の学び、対象者が求める訪問看護、レポート分析、質的記述的研究

はじめに

近年、日本は世界に類を見ない超高齢社会となり、人口における高齢者割合の上昇による多死社会の到来や、少子化による介護力不足などが課題となっている。厚生労働省は2015年に地域包括ケアシステムを打ち出し、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもと、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制の構築を推進した¹⁾。また、2017年度に公表された内閣府の調査²⁾では、「日常生活を送る上で介護が必要になった場合に、どこで介護を受けたい

か」という問いに、60歳以上では「自宅で介護してほしい」と回答した者が男性42.2%、女性30.2%であり、男女とも最も高かった。「治る見込みがない病気になった場合、最期はどこで迎えたいか」では、「自宅」54.6%で最も多く、次いで「病院などの医療施設」27.7%であった。これらのことを踏まえると、在宅療養のニーズが高まっていることが明らかであり、在宅療養をする人々を支援する人材や社会サービスの整備が必須である。

訪問看護サービスは1991年の老人保健法改正の中で初めて制度化され、当初は寝たきり老人のみが対象であったが、その後1994年の健康保険法改正によりあらゆる年代もその対象に含まれた。さらに、

2000年の介護保険制度制定とともに、介護サービスの一つに訪問看護サービスが位置付けられ、地域の中で療養生活を送る人々の支援において、中心的な役割を担うように求められている。訪問看護事業所は年々増加し、2018年4月現在、全国で10,418か所が稼働し³⁾、訪問看護事業所に従事する看護師は42,245人で、全看護師数1,149,397人に対して、3.7%の割合を占める⁴⁾。在宅医療の推進が求められる中、神経難病やがん罹患患者などの医療依存度が高い療養者が多く地域で療養生活を送っており、訪問看護の対象者は多岐にわたり、求められる知識や技術も高度化している。また、近年では精神保健及び精神障害者福祉に関する法律の一部改正に伴い、精神疾患をもつ療養者が地域で生活するようになったこと、さらに年々延伸する平均寿命に伴い、認知症高齢者が益々増加することが予測されるなどの現状を鑑みると、専門的な知識や技術を兼ね備えた訪問看護師のニーズは高く、担い手の育成が急がれている。

一方、看護師教育では、1997年の保健師助産師看護師養成所指定規則から在宅看護論が導入された。さらに2007年の当該指定規則カリキュラムの改正で統合分野に分類され、4単位の講義・演習に加え、2単位の実習が義務付けられた。

本学では、第3次カリキュラム(H21年～)で講義2単位、臨地実習1単位〔残りは他の科目で読み替えて実施。現在の第4次(H25年～)カリキュラムでは講義1単位、臨地実習1単位〕であった。臨地実習は、4年生の4月に近隣地域の訪問看護事業所に1事業所あたり2～3名ずつ、合計12か所にて実施している。学生は4日間で8～14名程度の訪問看護利用者宅に、看護師と同行訪問している。学生の実習時期は最終学年であり、それまでの領域別実習が一通り終了していることもあり、年代別の発達課題や疾患の理解、看護過程の展開などの学習はほ

ぼ理解している。そして、教員や実習指導者らは、学生の記録用紙やカンファレンス内容、学生の自己評価などを通じて、実習目標に沿った項目について学生一人一人の経験と学習達成状況などから、実習における学びを評価している。しかし、これまで学生が4日間で10名前後の療養者宅への訪問を通じて、在宅看護対象者のニーズや訪問看護活動の特性などをどのように俯瞰的に見たかという学びについての確認は十分に実施してこなかった。そこで、学生が実習終了後に提出したレポートを分析することで、在宅看護学実習を履修した学生が得た学びを把握することとした。レポートのテーマは「在宅看護の対象者が求める看護とは何か」であり、対象者が求める看護とは、すなわち広く在宅看護の意義を示す内容であると捉えることができると考えられた。さらに、本研究では、レポートから導き出された学生の学びから、在宅看護学の理解の程度を確認するとともに、本学の在宅看護学実習の今後の課題や方向性を検討する材料としたい。なお、本学の在宅看護学実習の概要は表1に示す。

目的

本学の在宅看護学実習を履修後に、学生は、在宅看護の対象者に対する訪問看護師による看護活動や求められる役割の理解から在宅看護学実習についてどのような学びを得たかを明らかにし、在宅看護学の理解を深めるための今後の課題や方向性を検討する。

表1 本学在宅看護学実習の概要

目的：在宅看護における訪問看護ステーションの機能と活動内容を理解し、在宅療養者とその家族への支援方法を学ぶ。

目標：1) 訪問看護ステーションの機能と活動内容を理解する。
2) 生活の中で療養する対象を理解し、看護過程が展開できる。
3) 対象者の価値観、意思を尊重した看護を習得する。
4) 学生として提供できる看護を体験し、評価する。

日数：4日間

履修対象者：本学看護学科4年生(51名)

方法

研究デザイン：質的記述的研究である。

対象：平成25年4月に在宅看護学実習を履修した4年生51名のうち、研究の主旨を理解し協力が得られた学生のレポートとした。

データ収集方法：在宅看護学実習の開始前に、研究者より、研究の主旨・目的・方法等に関する説明を行い、本研究への協力を依頼した。その後、研究協力の意向のある学生には、実習前に承諾書の提出を依頼した。さらに、実習終了後に最終レポートのコピーを無記名で提出するように伝えた。なお、最終レポートのテーマは、「在宅看護の対象者が求めている看護とは何か」であり、A4用紙1枚に記入されていた。

分析方法：分析対象となったレポートに記載された記述の中から、在宅看護学実習における学びをデータとして抽出し、それらをコード化した。その後、同じ意味内容を示すコードの類似性と共通性をもとに集めてサブカテゴリを生成した。その後に、さらに抽象度を上げてカテゴリとし、最終的に訪問看護師に求められる役割やケアに関する在宅看護学実習の学びを意味する概念をコアカテゴリとして生成した。なお、分類にあたっては共同研究者間4名で共通理解が得られるまで検討を重ねた。

倫理的配慮：学生には研究の主旨・目的・方法等を十分に説明し、理解が得られるように対応した。また研究へ同意の有無は実習の成績評価には全く影響がないこと、分析に使用するレポートに記載された氏名等の個人情報が分かるものは全て暗号化し、個人が特定されないよう配慮すること、得られた研究データは鍵のかかる引き出しに保管し、情報漏えいには十分に配慮することを説明した。さらに、研究結果は、個人情報の流出がないように最大限配慮しつつ、学会発表や論文投稿などを行うことを説明した。なお、本研究は茨城県立医療大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号506号）。

結果

対象学生51名のうち31名から同意が得られ、分析の対象となったレポートは31件であった（回収率60.8%）。そこから、訪問看護師に求められる役割やケアに関する在宅看護学実習の学びとして343のデータが抽出され、コード化した。それらを意味が類似する内容ごとに集めて、53個のサブカテゴリとし、さらに類似性を考慮し13個のカテゴリに分類し、最終的に3つのコアカテゴリ【対象者ごとに異なる様々なニーズの理解】、住み慣れた自宅で療養者や家族が安心して生活できるための看護実践】、【療養者や家族の気持ちに寄り添うための信頼関係の構築】を生成した。それらの内容について下記に示す（表2）。なお、本文中では、コアカテゴリは【 】, カテゴリは[], サブカテゴリは《 》, また生データは“ ”として示す。

1. 【対象者ごとに異なる様々なニーズの理解】

このコアカテゴリには5個のカテゴリと20個のサブカテゴリが含まれ、在宅看護の対象者が身体的、精神的、社会的に様々な状態であり、対象ごとのニーズに訪問看護師が対応している状況を理解したカテゴリで構成されていた。

(1) [年齢・疾患・病期・家族背景など様々な状況で生活している]

学生は、在宅療養者やその家族が《幅広い年齢層や様々な疾患を対象としている》、《病期や日常生活レベルが様々である》、《セルフケアが困難である》、《経済的な困難である》、《介護する家族の背景が個々に異なっている》状況であると捉え、訪問看護ではあらゆる年代、疾患、家族構成などの人々を対象に看護展開をしていることを理解していた。

(2) [医療者がそばにいないことへの不安感がある]

学生は、療養生活を送る中で療養者やその家族が《急な状態変化に対する不安を抱える》状態であり、入院生活と異なり《医療者が常時いないことへの不安がある》という精神面の特徴を捉えていた。

(3) [在宅療養では孤独感や疲労感を抱えやすい]

学生は、“療養者も広い家の中に一人であることや話し相手がないことから寂しさを感じており、看護師に帰ってほしくないという気持ちをもつ”といった日々の生活における《療養者も家族も家に閉

表2 訪問看護師に求められる役割やケアに関する在宅看護学実習の学び

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
対象者ごとに異なる様々なニーズの理解	年齢・疾患・病期・家族背景など様々な状況で生活している	幅広い年齢層や様々な疾患を対象としている 病期や日常生活動作レベルが様々である セルフケアが困難である 経済的な困難がある 介護する家族の背景が個々に異なっている
	医療者がそばにいないことへの不安感がある	急な状態変化に対する不安を抱える 医療者が常時いないことへの不安がある
	在宅療養では孤独感や疲労感を抱えやすい	療養者も家族も家に閉じこもりがちになりやすく孤独を感じやすい 療養生活や介護生活で生じる辛い気持ちを誰かに受け止めてもらい 介護が長期化することで疲労が蓄積される
	訪問看護サービス提供により安心感が得られる	訪問看護サービスを受けることで療養者も家族も安心する 看護師に対して笑顔が見せて出迎えている 住み慣れた自宅で生活し続けたいと希望している 病気や障がいと上手く付き合って生活したい 家族のそばで生活したい
住み慣れた自宅で療養者や家族が安心して生活できるための看護実践	病気や障害を抱えながらも住み慣れた環境での生活を継続したい	病気や障害を抱えていても主体性をもって生活している 介護による頑張りを認めてもらうことで介護継続の意欲になる 家族の中でも個々に異なる価値観をもちながら生活している 家族の存在は在宅療養生活を継続する上で重要である 家族自身も健康上や生活上の課題を抱えながら介護している
	定期的なモニタリングによりわずかな状態変化を把握する	自宅定期的に健康状態の観察や看護ケアを実践する わずかな変化を見逃さないように対応する 今後起こりうる状態変化などに対して予測して関わる 看護師の訪問が療養者や家族の日常生活に刺激になる 会話から療養者や家族のニーズを情報収集し課題を抽出する 日々の変化を把握しづらい
	専門的な知識・技術を提供する	情報収集の方法を駆使して十分にアセスメントを行う 専門的知識に基づいた看護を提供する 難しい技術を家族に代わって提供する 社会資源が活用できるように支援する
	日頃から療養者や家族の不安が取りのぞけるように関わる	療養者の病状や家族の介護方法が大丈夫であることを伝える 療養者や家族と共に向き合う姿勢をとる
	家族をエンパワメントする	定期的な介護状況のアセスメントからケア方法をアドバイスする 介護負担の程度に合わせてサービスの調整を図る 常に家族の話を傾聴し気持ちが出出できるように関わる 家族が行っているケア内容・方法を尊重する 介護する家族を労う
	切れ目のない対応を行う	緊急時の連絡体制を整えておく 24時間対応の要請に応じる
療養者や家族の気持ちに寄り添うための信頼関係の構築	精神的な繋がりを大切にする	何気ない日常会話をすることで療養者や家族の気分転換を図る 療養者や家族が気軽に相談事や悩みを打ち明けられる存在になる 礼節を重要視する
	療養者と家族の思いを尊重したケア提供を行う	療養者や家族の希望ができる限り叶えられるように支援する 療養者や家族の価値観を認める 療養者や家族のこれまでの生活スタイルを尊重する 療養者や家族の思いを十分に受け入れる 療養者や家族のやる気を高める 療養者や家族が主体であることを意識して関わる 療養者や家族の思いを常に確認しながら看護ケアを提供する 療養者と家族とが良好な関係性を維持できるように意識する 経済的な面に配慮する
	多職種と協働する	多職種と連携により目標の共有化とケアマネジメントを行う 療養者や家族と主治医との間の橋渡しを行う

じこもりがちになりやすく孤独を感じやすい」状態であることを学んでいた。また、「対象者は各々が抱えている精神的な苦痛を表出し、それらを受け止めてもらえること、心の拠り所となるような人とのつながりを求めている」とあるように「療養生活や介護生活で生じる辛い気持ちを誰かに受け止めても

らいたい」といった療養者や家族が孤独感から他者との交流を求めている状態であることを理解していた。さらに、療養者や家族は、日々の療養生活の中で「介護が長期化することで疲労が蓄積される」状態に陥りやすいことを学んでいた。

(4) [訪問看護サービス提供により安心感が得られる]

学生は、“訪問看護師に状態を定期的にみてもらうことで安心して生活を送ることができる”という療養者や家族の発言から、療養者や家族が「訪問看護サービスを受けることで療養者も家族も安心する」ことを学び、訪問看護師の存在や在宅看護ケアそのものが安心をもたらす効果があることを理解していた。また、不安や孤独などがある中でも、療養者や家族の「看護師に対して笑顔が見せて出迎えている」といった穏やかな一面を持って生活している様子などを学んでいた。

(5) [病気や障害を抱えながらも住み慣れた環境での生活を継続したい]

学生は、療養者が病気や障がいに関わらず自分のペースで「住み慣れた自宅で生活し続けたい」と希望していること、病気や障がいがあっても「病気や障がいと上手く付き合って生活したい」、「家族のそばで生活したい」、療養者や家族が看護師や学生を“招いている立場であり”、“自分の意志で医療やケアを選択したい”といった「病気や障害を抱えていても主体性をもって生活している」ことを学んでいた。また家族は介護中心の生活に陥りやすいため「介護による頑張りを認めてもらうことで介護継続の意欲になる」と思っている一方で、「家族の中でも個々に異なる価値観をもちながら生活している」とし、家族が担う介護量の大小に関わらず「家族の存在は在宅療養生活を継続する上で重要である」が、「家族自身も健康上や生活上の課題を抱えながら介護している」危機的状況でありつつも、「病気や障害を抱えながらも住み慣れた環境での生活を継続したい」と願っていることを学んでいた。

2. 【住み慣れた自宅で療養者や家族が安心して生活できるための看護実践】

このコアカテゴリには5個のカテゴリと22個のサブカテゴリが含まれ、在宅療養者がもつ住み慣れた自宅で安心して生活したいという思いを実現するための訪問看護の看護実践や役割・機能について理解したカテゴリで構成されていた。

(1) [定期的なモニタリングによりわずかな状態変化を把握する]

療養者が訪問看護師に期待するケアの内容としての5個のカテゴリと17個のサブカテゴリが含まれた。

学生は、「自宅で定期的に健康状態の観察や看護ケアを実践する」という在宅看護における状態観察や実際の看護支援を学び、「わずかな変化を見逃さないように対応する」という予防的な看護ケアの重要性と、「今後起こりうると思われる症状について、ケア方法などを説明するなど先を見通したケア」などの「今後起こりうる状態変化などに対して予測して関わる」ケアにより、療養者が安定して在宅での生活を継続できるための支援について学習していた。また、療養者や家族の生活が閉鎖的で単調になりがちであるために、「看護師の訪問が療養者や家族の日常生活に刺激になる」という役割を訪問看護師が担う一方で、訪問時に語られる「会話から療養者や家族のニーズを情報収集し課題を抽出する」といったアセスメント方法を学んでいた。しかし、同時に、常時そばでモニタリングしていないことからくる「日々の変化を把握しづらい」といった支援のタイミングの難しさについても学んでいた。

(2) [専門的な知識・技術を提供する]

学生は、訪問看護師が他職種と連携しながら「情報収集の方法を駆使して十分にアセスメントを行う」ことや、在宅においても「専門的知識に基づいた看護を提供する」機能があることで、療養者・家族の安心に繋がっていくことを理解していた。さらに、医療の専門家でない家族への支援として「難しい技術を家族に代わって提供する」といった支援や、家族の「介護力、経済的負担を考え、他職種と連携し家族を支援していく必要がある」こと、「地域との交流が希薄になっている療養者に対して、地域行事への参加などを地域との関わりが得られるような支援をしていく必要がある」といった「社会資源が活用できるように支援する」ことができるように調整している役割を担っていることを学んでいた。

(3) [日頃から療養者や家族の不安が取りのぞけるように関わる]

学生は、訪問看護師が療養者や家族に対して、「療養者の病状や家族の介護方法が大丈夫であることを伝える」ということが安心を保障する支援になっていることを学んでいた。さらに、訪問看護師が療養者や家族と精神的苦痛を分かち合うといった看護実践を行うことで、「療養者や家族と共に向き合う姿勢をとる」といった支援に繋がっていると理解していた。

(4) [家族をエンパワメントする]

学生は、家族が介護による負担を抱えやすい状態であることに触れ、訪問看護師が家族の担う《定期的な介護状況のアセスメントからケア方法をアドバイスする》、《介護負担の程度に合わせてサービスの調整を図る》などの家族介護者の介護力を高める支援について学んでいた。また、《常に家族の話を傾聴し気持ちが表出できるように関わる》ことで気持ちの受け止めが大切であると同時に、普段の世話は家族であり、《家族が行っているケア内容・方法を尊重する》姿勢の重要性を学んでいた。さらに、“家族の関係性が良好な家族であっても、介護のストレスや疲れは溜まっていて、他者からのねぎらいの言葉が頑張る原動力になっている”という《介護する家族を労う》という支援が介護負担の軽減に繋がっていくことと学んでいた。

(5) [切れ目のない対応を行う]

学生は、訪問看護師が《緊急時の連絡体制を整えておく》ことや、《24時間対応の要請に応じる》といった、“何かあれば24時間気軽にお電話下さい”と声を掛け、医療者がそばにいないでも緊急事態の際にも家族が頼れるような環境作りを行っていた”ことで、緊急時の対応が受けられるようにケアを調整して、より安定した療養生活を支援する関わりについて学んだ。

3. 【療養者や家族の気持ちに寄り添うための信頼関係の構築】

このコアカテゴリには3個のカテゴリと15個のサブカテゴリが含まれ、在宅療養者や家族の思いや希望に寄り添うために、訪問看護師による信頼関係構築のための看護実践を理解したカテゴリで構成されていた。

(1) [精神的な繋がりを大切にする]

学生は、訪問看護師が行う療養者や家族との関係作りにおいて《何気ない日常会話をすることで療養者や家族の気分転換を図る》コミュニケーション技術を捉える一方で、医療・看護の専門家として《療養者や家族が気軽に相談事や悩みを打ち明けられる存在になる》看護技術の実践を学んでいた。また、訪問看護サービスは契約により成立するものであり、言葉遣いや態度を始めとする《礼節を重要視する》医療職としての基本的な態度について学んでいた。

(2) [療養者と家族の思いを尊重したケア提供を行う]

学生は、訪問看護師が《療養者や家族の希望ができる限り叶えられるように支援する》ことについて、“在宅で看取りを希望している家族にとって、自宅で家族自身がケアを行うことで満足感につながり、死の受容に関してもプラスに働く”と理解していた。“一方的な押し付けでは訪問看護は成り立たずに”《療養者や家族の価値観を認める》や、《療養者や家族が行ってきたこれまでの生活スタイルを尊重する》といった訪問看護師の支援は、“訪問看護が療養者・家族の生活の場に足を踏み入れて必要な医療や看護、生活援助を行うのみで積極的に何か状況を変えることは求められていない”と学んでいた。そして、看護師が療養者や家族の思いなどを確認しながら《療養者や家族の思いを十分に受け入れる》姿勢であることを理解していた。さらに、訪問看護師による支援が《療養者や家族のやる気を高める》、《療養者や家族が主体であることを意識して関わる》という自立支援に繋がっていることを学んでいた。また、在宅看護は長期間にわたって支援するため、《療養者や家族の思いを常に確認しながら看護ケアを提供する》、《療養者と家族とが良好な関係性を維持できるように意識する》支援について学んでいた。さらに、“医療や看護処置を行う物品は極力家庭にあるものを使用する等の工夫をしながら、経済的な負担の配慮も求められる”とあり、《経済的な面に配慮する》という訪問看護師の姿勢が、療養者や家族との信頼関係に繋がることが理解していた。

(3) [多職種と協働する]

学生は、在宅療養では限られた職種による限られた資源の活用で終わるのではなく、訪問看護師が積極的に、《多職種と連携により目標の共有化とケアマネジメントを行う》役割を担い、その多職種のチームの機能を高めることを理解していた。また、療養者や家族はパワーバランスが働きやすい医師に対して自己主張したり、希望や思いを伝えられない状況に陥りやすいことから、訪問看護師が療養者や家族と《療養者や家族と主治医との間の橋渡しを行う》ことで療養生活の質を高める支援に繋がっていることを学習していた。

考察

1. 在宅看護学実習を履修した学生の学びの内容

最終レポートの分析から、学生は4日間の実習を通して、在宅生活を送る療養者の特徴や訪問看護師の機能・役割・ケア提供方法などを広く学んでいることが把握できた。

学生は、在宅看護の対象者があらゆる年代であり、抱えている病状や病期、日常生活行動レベルなども様々であるため、対象者一人一人がもつニーズが異なっていることを理解していた。在宅看護の対象者の特徴はさまざまにとらえ方があり、福井⁵⁾は、①年齢からみた特徴、②疾患からみた特徴、③障害からみた特徴、④在宅療養状態別に分類している。本研究で得られた結果は、福井の示す特徴と同様であった。

また、学生は、訪問看護師が定期的なモニタリングにより常に療養者の状態変化を捉え、予防という視点を踏まえて専門的知識・技術を提供していることを理解していた。さらに学生は、訪問看護師が対象者や家族に対して、専門的なアセスメントを踏まえ「大丈夫であることを伝える」言葉かけが、在宅療養支援において重要な支援の一つであることを学んでいた。本学ではすべての領域別実習終了後の4年次に在宅看護学実習を履修するため、学生はこれまでに学んだ対象別・疾患別の看護実践に加えて、さらに疾病や障害をもちながらも上手く生活に医療を組み込ませる看護ケアについて学習を深めていた。学生は、訪問看護師による“大丈夫である”という言葉かけや気軽に相談できる関係作りの重要性を学ぶことで、訪問看護師が療養者や家族の思いを常に把握し、これまで過ごしてきた生活や価値観を尊重しながら、その人らしい生活ができるように支援していること、そして療養者や家族が住み慣れた自宅で安心して生活を、より長く過ごせるように支援しているという在宅看護の役割を理解していた。

山村ら⁶⁾は、学生の学びの中に、療養者・家族の生活に自ずと疾病の自己管理の必要性が含まれており、生活が成り立ってこそその疾病管理の必要性があるという学生の学びを報告している。鈴木ら⁷⁾は、学生が在宅看護に必要な看護活動として残存機能を維持するリハビリテーションの実践といった、QOL向上を重視した看護を提供していることを報

告している。疾病の自己管理や、残存機能の活用のための積極的なリハビリテーションの実践といったセルフケア能力の維持・向上のための支援に関する学びは、本研究の学生の学びに含まれない内容であった。このことは、山村ら⁶⁾や鈴木ら⁷⁾の報告と比較し、本学の実習日数は4日間であるために、一人の対象者に一度きりしか訪問できない学生が多く、日頃から訪問看護師が実践しているセルフケア支援が理解しづらかった可能性が考えられる。さらに小児や難病患者への同行訪問では、医療依存度が高い対象者への看護介入であり、対象者が自らセルフケア能力を発揮する面が少なかったということが影響していたものとする。ただし、今回の分析は学生のレポートテーマが「在宅看護の対象者の求める看護」であったために、学生が在宅看護学実習を履修して得た学びを十分に反映できなかった面があったと考える。一方、本研究は、小路ら⁸⁾による在宅看護実習における学びの報告との比較では、抽出された内容は概ね本学の学生の学びとは同じような内容であった。

そして、学生は訪問看護師による「礼節を重要視する」態度や、「何気ない日常会話を大切にする」関わりの中からきちんと情報収集するといった看護技術を提供する場面を捉えていた。そこから、学生は、訪問看護を展開する場所が対象者の生活の場であること、一方的に必要な看護や医療的技術を提供するのではなく、まず初めに対象者の生活のペースに合わせたアプローチを行い、対象者に受け入れてもらって、さらにそこから初めて看護実践を行えていることを学んでいた。学生が学んだこのような看護実践は、訪問看護師として必ず身につけておかなければならない看護の基本であり、信頼関係を構築するために重要なコミュニケーション技術の一つである。また、学生は、在宅療養を支援する上で、療養者や家族の自己決定を促す関わりが必要であり、訪問看護師が、療養者や家族のもつこれまでの生活様式や価値観、在宅療養等に対する希望に十分に耳を傾け、療養者や家族が主体的になれるような看護実践を実施していることを理解していた。そして、在宅看護の対象は療養者と家族であり、家族内の関係性を調整する役割があること、さらに療養者と家族が質の高い療養生活を過ごすために多職種間の連携・調整する役割を担っていること、そのために信

頼関係の構築を目指した訪問看護の機能が重要であると学んでいた。これらは、在宅看護学実習に特徴的な学びであると考えられる。

以上のことから、学生は、対象者が様々な不安や問題を抱えているが、住み慣れた自宅で生活し続けたいというニーズがあり、訪問看護師は対象者が住み慣れた在宅で安心して過ごせるように支援する役割があること、そして安心できる療養生活を支援するためには、訪問看護師と対象との間に信頼関係が必要であることを学んでおり、本研究の結果で得られたカテゴリの関係を図1に示した。

本研究は、在宅看護学実習を履修した学生の最終レポートの分析を実施した。それにより、学生が在宅看護の対象者の多様なニーズを把握やその看護活動の実践を理解し、在宅看護の役割について学んでいることが明らかになった。また、学生は、訪問看護師は、在宅療養者・家族が、医療者が24時間いない環境であっても安心して療養生活を送れるような支援を実施していること、看護実践において互いの信頼構築が重要であり、看護師は信頼構築のために専門的な技術を駆使して療養者・家族に寄り添っている、と捉えていることが明らかになった。

2. 在宅看護学実習における今後の課題と方向性

先行文献^{6), 7)}との比較により、本学の在宅看護学実習を履修した学生の学びは、疾病の自己管理や残存機能の維持・向上のためのリハビリテーション支援の学びが少なかった。本学の実習は月曜日から木曜日の連続した4日間を訪問看護事業所で同行訪問を実施している。その際、週に1回しか訪問看護を利用していない対象者宅への同行訪問を経験することにより、多様な対象者の特徴を理解することは可能であるが、在宅生活の継続支援を十分に理解することは困難であると推測される。小塩ら⁹⁾は、学

生は2週間の実習で訪問看護に複数回同行することができ、看護の対象者を周りの人や環境と影響し合っている「生活者」であることや対象者に適した看護実践の在り方を理解することができたことを報告し、複数回同行の有用性を述べている。今後、本学での在宅看護学実習の履修方法について、同じ対象者に複数回の訪問ができるよう、実習期間の延長等の検討が必要であるという示唆が得られた。

さらに、本研究は、在宅看護学実習を履修した学生のレポートを対象にした研究であり、得られた学びは研究協力のあった学生全体の学びである。したがって、個々の学生が学び取った学習内容に差が生じていることが考えられる。このことより、実習を履修した学生全員が同じように学びを深められるように、学習を促す必要がある。例えば、実習期間中の中間カンファレンスや実習終了後の最終カンファレンスの中で、学生が各自の学んだ内容を発表し、互いに共有することで実際に体験していない学生の学びに繋がると考える。その際には、カンファレンスの進行や内容を十分に検討し、学生がより深く学びを共有できるように教員も支援することが大切である。

また、実習の学びを効果的に深められるように、実習前の準備も重要である。例えば、在宅看護学実習開始前までに、疾病の理解や生活支援に関する看護技術等を十分に練習しておくことで、実習時には在宅ケア管理の理解を深められる。さらに、実習前に実習課題を明確にしておくことで、実習中の学びの視点を具体的に設定することに繋がる。現在、本学では事前学習課題として、実習中に学びたい内容を学生に記載させ、学びが深まるように実習を展開している。

これらの考察から、今後も内容を吟味しながら、在宅看護学実習がより深い学習に繋がるように、引き続き学生の学びを確認していく必要がある。

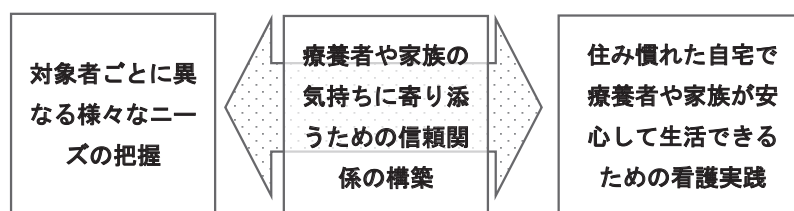


図1 在宅看護学実習を履修した学生の学び

研究の限界

本研究は、学生の実習終了後の最終レポート「在宅看護の対象者が求めている看護とは何か」を分析したものであるが、履修した全学生の学びを得ることができなかつたため、在宅看護学実習におけるすべての学びを反映しているとは言い難い。今後も、教員として学生との関りの中で、随時、在宅看護学の学生の学びを確認していきたい。

結語

本研究では、学生の最終レポートの一つの分析により、学生は、在宅看護学の理解として、【対象者ごとに異なる様々なニーズの理解】、【住み慣れた自宅で療養者や家族が安心して生活できるための看護実践】、【療養者や家族の気持ちに寄り添うための信頼関係の構築】に関連した内容を学んでいた。

謝辞

今回の研究に快く賛同して下さった看護学科4年生の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省. 地域包括ケアシステム. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/, (参照2018/09/22)
- 2) 内閣府. 平成29年度版高齢社会白書(全体版). https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/29pdf_index.html, (参照2018/09/22)
- 3) 一般社団法人全国訪問看護事業協会. 訪問看護ステーション基本情報. <https://www.zenhokan.or.jp/new/topic/basic/>, (参照2018/09/22)
- 4) 国民衛生の動向・厚生指針 増刊. 一般財団法人厚生労働統計協会. 2018, 65(9).
- 5) 福井小紀子. 系統看護学講座 統合分野 在宅看護論. 河原加代子. 医学書院, 2018.
- 6) 山村江美子, 田中悠美, 稲垣優子, 酒井昌子. 在宅看護論実習における学び-対象の理解と在宅看護実践の特性に焦点をあてて-. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 2015, 23: 41-51.
- 7) 鈴木昭子, 前田和子. 在宅看護実習における学生の学び-終了時レポートの分析から-. 茨城キリスト教大学看護学部紀要. 2016, 8(1). 29-37.
- 8) 小路ますみ, 小森直美, 笹尾松美: 在宅看護実習における学びの構造. 福岡県立大学看護学研究紀要. 2007, 4(1), 10-18.
- 9) 小塩泰代, 白石知子, 大橋裕子, 鈴木寛之, 宮武真生子, 大島圭恵, 石黒美穂, 山口知香枝, 城憲秀, 玉利玲子. 在宅看護論実習の振り返り 実習内容と学生の学びの状況の考察. 中部大学生命健康科学研究所紀要. 2012, 8, 49-55.

Learning Among Students Who Participate in Homecare Nursing Training and
Write Reports on the Understanding of Nursing Care
– An Analysis of Post-Training Reports –

Miyoko Tsurumi¹⁾, Akie Ayabe¹⁾, Shinobu Yamaguchi¹⁾, Yuko Takamura¹⁾

¹⁾ Department of Nursing, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

Abstract

Purpose: This study aimed to understand the learning among students who participate in homecare nursing training and write reports on the understanding of nursing care in home training.

Methods: I explained the study to 51 fourth-year nursing students who had finished training; I obtained their consent and cooperation in analyzing students' reports on the subject "What are the demands of homecare nursing patients?"; the reports were qualitatively analyzed.

Results: I analyzed one student report provided on an A4 paper for 31 of the agreements (60.8% of recoveries). The student studied the following 3 angles in home healthcare support: [homecare nurses grasped the different needs of each patient], [aggressive nursing practice for the purpose of supporting the patient and the family, ensuring that they can live at home, where they would like to continue living for a long time], and [building of a relationship of mutual trust by walking together with the patient receiving the support and the family]; the student identified these as important aspects during training by visiting a care station.

Conclusions: The angle of the nursing a student was to participate in training for 4 days, and which was learned through clinical training until now; moreover, after understanding a recuperation person and the situation of the family and the visit nurse accurately, an element necessary to home health care could be learned.

Keywords: Homecare Nursing Practice, Learning of Nursing Students, Support by the Visiting Nurse that a Target Person Demands, Qualitative descriptive study